



カントウータ

Cantuta

No. 31



チャカルタヤ宇宙線観測所（標高5200m）から見たワイナポシ山（標高6088m）

撮影者 椿 秀洋

1. 南米で子供に教育を受けさせて 細萱 恵子
2. ボリビアとパラグアイの日本語教育の行方
現地での取材などから 佐藤 葉
3. 南米大陸最高峰「アコンカグア6,962m」に登頂して
..... 本間奈生美
4. 広い世界を家とせよ！！ 今村忠助の意
『残された宝庫—南米のボリビア』 今村 忠雄

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

<http://nipponbolivia.org>

1. 南米で子供に教育を受けさせて

日本経済大学経営学部 教授

日本ボリビア協会 常務理事

細萱 恵子

今から 10 年くらい前になりますが、JICA の専門家として、コロンビアのボゴタにある国家企画庁に赴任しました。その時、息子が大学生 2 年生、娘が高校 2 年生でした。息子はネットでコロンビアの情報を見て、「そんなところに行ったら人生を狂わせる」と消極的でしたが、南米で暮らし、教育を受ければ、自然とスペイン語もマスターするだろうし、若い時に海外で暮らすという経験は絶対に今後に生きてくるよ、と説得して連れて行くことにしました。

とは言うものの、二人の学校探しは業務の合間に行うもので、なかなか大変でした。まず、二人とも赴任が決まってからの数か月のスペイン語の勉強のみで、現地の学校に入ろうとするのですから、無謀と言えば無謀な計画です。コロンビアのインターナショナルスクールの入学金は 140 万円で、授業料は JICA が出してくれるといっても、2 年間の教育経費としては大変な額です。結局、現地の私立高校へ行かせることとして、探しました。後で帰国子女入試を受けるとき、この判断が非常に有利な結果をもたらしたことが分かりました。帰国子女入試はインターナショナルスクールを出れば、英語で行うことになりますが、こちらは何年もヨーロッパ、アメリカなど英語圏で勉強した帰国子女が多数集まっていて、非常にレベルが高い競争を強いられます。一方、スペイン語の帰国子女入試は競争相手がほとんどいなかったのが大変有利でした。

話を戻すと、娘の高校探しは困難を極めました。家の近くに評判の良い学校があると聞いて訪ねますと、「ここは男子校です」というような基本的間違いから、面接すると「スペイン語が話せないのも、無理です」という拒絶まで、親子で落ち込む経験もしました。そうこうしている内に、私の苦勞を見ていた国家企画庁の秘書が、「良い学校があるから紹介してあげる」と言ってくれ、娘を連れて、一緒に高

校を訪れました。その校長先生が面接してくれたのですが、「名前は？」「何歳ですか？」などの基本文型しか話せません。しかし、その校長先生が言うには、「日本人は数学ができるから問題ない」と言って入学を許可してくれたのです。後で知ったことですが、コロンビアの数学の教科書で古典的ともいえるべきテキストは日本から移住した日本人の数学の先生が書いたものであり、その孫娘がその高校に入っていて同級生になりました。彼女はコロンビアの最大部数を誇る新聞「El Tiempo」社主催のコンクールで物理の優秀賞を取り、両親も国立大学の学者として有名でした。それまで積み重ねてきた南米における日系人の地道な努力と日系人に対する南米の人たちの高い評価が娘を救ってくれました。



写真 1-1. 娘を受け入れてくれた Calasanz 校

何はともあれ、コロンビアの CALASANZ 高校 10 年生になった娘は、家でのスペイン語の個人教授も受け、少しずつ話せるようになってきました。しかし、学校の授業についていけるほどのスペイン語力ではないのですから、大変苦勞をしたと思います。自宅に帰ってきて、ポロポロと涙を流すこともあり

そうこうしている内に、高校から呼び出しがあり

ました。仕事を終えて、高校に行くと、副校長の神父さんが、「ミズホは別に卒業するつもりではありませんね？」と聞いてきます。私は「いえ、卒業するつもりです」。卒業しないと、日本に帰って大学を受験できなくなります。すると、英語もそれほど話せないし、数学、物理も成績が悪い、と言います。私も学校の教科書を見たり、宿題の手伝いをしたりして、内容も見ていましたが、数学も既に高校で勉強したことの繰り返しですし、物理も難しい問題ではありません。しかし、単に数式で出題されれば、答えられるでしょうけど、その前に、「時速何キロで走るA列車と時速何キロで走るB列車が衝突した時、～」というような文章問題ばかりで、電子辞書を使って、設問を理解する前に時間が終わってしまいます。私は正直にそのように話し、「数学や物理の学力の問題ではなく、スペイン語の設問を理解するのに時間が掛かって、解けないだけです」と言いますと、神父さんは「分かりました。ミズホは学校に満足していますか？」と聞くので、「はい、大変満足しています。お友達もたくさん来て、遊びに来てくれるし、皆クラスメイトが助けてくれます」と答えると、「ミズホが満足しているのなら結構です」とおっしゃってくれました。

後で知ったことですが、やはり父親が日本人で母親がコロンビア人の兄弟が同じように私立高校に入りましたが、途中で退学させられました。お母さんはコロンビア人ですから、家庭ではスペイン語を話すでしょうし、一見スペイン語力に何の問題がないかのように思えます。流暢に話せるだけに、学力に問題がある場合、娘のような対応をしてもらえなかった可能性があります。また、南米に暮らして感じるのは、日系人の子弟の日本語力とスペイン語力の問題です。家庭の中で、日本語とスペイン語の混在、学校教育がスペイン語でアカデミックな思考をスペイン語で行うというケースが多いでしょうが、二つの言語が両方とも十分に読み書きできるバイリンガルであるというケースは比較的少なく、どちらも中途半端であるセミリンガルの場合が多いように感じ

ます。一見流暢に話せるので、問題はむしろ根深いとも言えます。

その後、娘はどの教科でも良い成績が取れるよう



写真1-2. クラスメイトとお寿司パーティ
皆お寿司が大好き



写真1-3. 卒業式でクラスメイトと一緒に

になり、AutoCAD^{※1}の授業などは私が一通りの機能を教えておいたことで、クラスで一番を取ることにも出来ました。(知らなければそのままでしょうけど、CADの先生は例えば「平行線」コマンドを知らず、線と線の距離を入れて、「line」コマンドで引く、というように、あまり様々な機能を使いこなせないレベルだということも分かりました)。また、水泳は日本の学校教育の体育のようなプログラムがなく、同級生は皆、Estrato6^{※2}に住む高額所得層の子弟ですが、水泳をあまり経験していないようで、校内の大会でダントツで優勝できたりして、学校生活で存在

価値を示す機会も得られるようになりました。スペイン語は私よりも話せるようになり、国家認定の高校卒業試験にも合格しましたので、無事 11 年生を卒業することができました。

しかし、帰国してからの帰国子女入試はまた、大変な経験でした。というのは、コロンビアの学校教育は 11 年制ですが、日本は 12 年制です。高校 2 年生途中でコロンビアに行ったので、13 年間学校教育を受けている訳ですが、それがなかなか認められません。慶應義塾大学、横浜国立大学はもう 1 年高校へ行ってから受験して下さい、と言います。6 月に帰国しているのですから、もう一年と言われれば、あと 2 年遅れることになります。名古屋大学だけは、アドミッションセンターからの問い合わせの電話が来て、「その国の教育制度の中で、高校卒業と認められているわけですね？」と聞いてくれ、ようやく受験できました。日本の教育も国際化が必要だと言われているのに、トータル 12 年以上学校教育を受けているのに、11 年制の国の高校を卒業しているからと受験資格がないなんて、と、哀しくなりました。※3

息子は大学の交換留学の制度を利用して、Externado 大学に 1 年と少し在籍し、相互単位認定により卒業単位として組み入れることができました。二人とも卒業は 1 年遅れましたが、それぞれ得難い貴重な経験をしたと思います。海外経験によって、二人とも、日本にいただけでは感じられない、日本人としての意識が芽生え、仕事は、世界で日本のプレゼンスを上げられるような分野で働きたいと考え、それぞれに歩んでいます。

「スペイン語なんて何か月か現地に暮らしたら話せるようになるから大丈夫」と言って連れて行きましたが、考えてみると、ただ生活するレベルのスペイン語ではなく、2 年間で大学入学資格を得なければならないのですから本人も大変だったと思います。しかし、何とかくらいについて頑張ってくれ、親子で本当に様々な苦労にも直面しましたが、南米赴任に子供たちを連れて行き、南米で学校教育を受けさせたことは、決して無駄にはならなかったと今は思い

ます。娘の高校の同級生は、コロンビアの高校を出てから、アメリカ、スペイン、チリなど、それぞれが世界の大学に進学し、また、高校で日本語を教えてあげたという同級生は、昨年東京大学大学院に留学してきました。今でも連絡を取り合い、国際的な交友関係が広がっているようです。

(終わり)



写真 1-4. Externado 大学図書館 植栽がきれいな大学
ボゴタは常春もしくは常秋の気候で一年中花が咲いている



写真 1-5. ボゴタ市内の警察官
予想を裏切って笑顔で親しみやすく、写真にも納まってくれる

※1 : オートデスク社の CAD ソフトで機械 CAD から建築 CAD、ファッションにおける柄の配置や型紙制作まで世界で広く使われている汎用ソフト

※2 : Estrato とはスペイン語で「階層」の意味で

すが、コロンビアでは住居地は Estrato 1 から Estrato 6 まで区分され、どの Estrato に住んでいるかによって、水道代、電気代から税金まで負担が異なるようになっていきます。

※3: 今年の慶応義塾大学の帰国子女入試要項にある受験資格は下記の通りです。①から④のすべてを満たすこと、という条件がついています。娘の場合は、「国の内外を問わず通常の学校教育過程を 12 年以上修め、かつコロンビアにおいてその国の教育課程に基づく高等学校に最終学年を含む 10 年生、11 年生を 2 年間継続して在籍し、卒業したもの」で、「その国の大学入学資格を取得している」ので、すべての条件を満たしています。

しかし、内外の学校教育をトータル 12 年間以上受けたことをどう評価するかは、結局各大学の判断に掛かっています。

<出願資格>

次のすべての条件を満たすこと

- ① 国の内外を問わず通常の学校教育課程 12 年以上を修め、かつ海外において外国の教育課程に基づく高等学校に最終学年を含め 2 年以上継続して在籍し卒業したものおよび卒業見込みの者
- ② 滞在国・地域の学校教育制度に基づく大学入学資格を有する者
- ③ 各国の大学入学に必要な国家試験などの統一試験またはこれに準ずる試験を受験し、試験結果を提出することが出来る者
- ④ 過年度に出願していない者

2. ボリビアとパラグアイの日本語教育の行方——現地での取材などから

日本語教師・ライター

佐藤 葉

私は 2013 年から 2015 年までの 1 年 7 カ月間、ボリビアのコチャバンバで日本語教室の立ち上げに携

わったが、日本語教室の基礎作りに奮闘していたた



写真 2-1. コチャバンバ日本語学級 ひのき 2013 年

めボリビア全体の日本語教育について把握する余裕はあまりなかった。

2017 年にはパラグアイへ赴任したが、『パラグアイ日本人移住 80 周年記念誌』の編纂・編集指導が業務だったので日本語教育に直接携わることはなかった。しかし首都アスンシオンを拠点として業務を行



写真 2-2. 日本語学級「HINOKI」の外観 2013 年

うかたわら国内 9 カ所にある日本人会を何度か訪問し、各地域日系社会の歴史や日本人会の活動、その活動の一環として主要な位置を占める日本語教育についても聞き取り調査や記事作成のための取材を行った。

ボリビアの日本語学習

コチャバンバでの日本語教室開設当初は物珍しさも手伝ってか、学習希望者が多かった。当地の日系人数は日本人会設立時には約 100～150 人くらいと把握されていたが、この中にはボリビア人配偶者な

ども含まれていたようなので、実数はこれより少ないと考えられる。移住地を出た 2 世、3 世が多く、日系人学習者のほとんどは当初日本語を話すことができなかった。しかし自分のルーツに繋がる言葉として日本語に興味を持っており、教室で他の日系の若者たちと知り合うにつれて仲間意識が芽生え、交流が楽しくなり続けて教室に通ってきた。

日系人以外のボリビア人学習者は、日本のアニメや歌などサブカルチャーが好きで日本語が理解できるようになり、日本語で日本の文化を楽しみたい人たちが大半だった。そのなかで大学生を中心とした日本留学を目標にしている学習者たちの意欲は高く、日本の文化を楽しみたい人の 2 倍の速さで学習内容を吸収し、1 年後には片言の日本語ながら教師の私と会話ができるようになった。

ボリビアでは 1997 年に、「ボリビア日本語教育研究委員会」が日本語教師のネットワークとしてサンタクルスに設けられ、年 2 回全国規模の日本語教師の合同研修会と教材開発が行われている。これはボリビアで生まれ育った

日系人の子どもたち向けに、より身近な題材による日本語教育のあり方や教材の研究を目的としている。それまでは日本の国語教科書を使い日本式の国語教育を行ってきたが、2 世 3 世が増えるにつれ日本の文化を中心とした国語教科書では理解できないことがあり、しだいに外国語としての日本語教育に転換してきている。同時に、日本語の背景にある日本文化も教える継承日本語教育（注1）も、課題のひとつとなっている。

ボリビアの日系人数は 2016 年推定（注2）11,350 人である（外務省）。日本語教育は 1950 年代に日本人移住地で始まり、現在はおもに初等教育では非正規科目として、あるいは学校外教育の場で行われている。ラパス市、サンタクルス市、オキナワ移住地、サンファン移住地、コチャバンバ市など、国内各地の学習機関数は 6、教師数 36 人、学習者数 489 人。そのなかで初・中・高等教育を除いた日本語学習者数は 298 人で、学習者全体の 60.9%となる（国際交

流基金、2015 年）。

パラグアイの日本語学習

パラグアイの日本語教育は、1936 年のラ・コルメナ地域への移住者により始められた。太平洋戦争中は日本語教育が禁止されたが、3、4 人ずつの子どもたちに納屋などでこっそり日本語を教えた。1936 年に 1 歳で移住した女性は、「日本を何も知らないけれど子どもたちのために夜、ランプの灯りのもとで教材を作り、一所懸命日本語を教えた」と話す。

パラグアイの日系人数は、2016 年の推定で約 1 万人である（外務省）。日本語教育機関数は 16、教師数 91 人、学習者数 3,725 人。初・中・高等教育を除いた日本語学習者数は 1,437 人で学習者全体の 38.6 %である（国際交流基金、2015 年）。

国内 9 ヲ所の日系社会地域（移住地+都市部）には日本人会運営の日本語学校があり、パラグアイ国の教育を基本としたうえで日本語教育の時間割を組んでいるが、学習進度や内容の定着は地域の学習環境条件などに左右されている。たとえば、現在も日本人移住者が多い農村部では日本の国語教科書を使用し読解力も高いが、パラグアイ人や外国人移住者の多い都市部では日本の国語教科書ではなく外国語としての日本語教科書を使用しており進度は遅くなっている。また農村部の移住地であっても、日本人移住者以外の外国人移住者が多い地域ではやはり日本語教科書を使い学習進度も遅い。

日系社会全体についても、2 世、3 世が増えるにつれ教材を工夫し、日本語への興味とともに日本語力を引き上げることが課題となっている。各地地域日本人会によって構成された日本人会連合会は、全国の日本語学校対象にスピーチコンテストを開催するなどの努力をしている。しかし優秀なスピーチをする学習者がいる一方で、各学校とも学習者の日本語力には差があり、カリキュラムの編成や指導などに教師たちは悩みを抱えている。そのなかで、習熟度別クラス編成を採り入れた学校では成果を上げているとのことだ。

また近年、移住地周辺のパラグアイ人にも日本語の

学習希望者が出ているとのことで、日本人会会費による運営である日本語学校への現地人の学習者受け入れの問題、それによりさらに多様になる学習者への対応も課題となっている。

もう一つボリビアとも共通する課題が、日本語教師の不足だ。その原因としてあげられる点は、日本語教育が現地教育機関外の活動のため学校経営上日本語教師の報酬手当が少ないこと、日本語教師への身分保障が低いことなどから、若い人たちにとって日本語教師が職業選択の1つとならないことなどである。また、ブラジルや日本などで日本語教授研修を受けた教師が少ないこと、各学校とも現地採用の教師が多くそれらの教師への日本語教授法の教育が

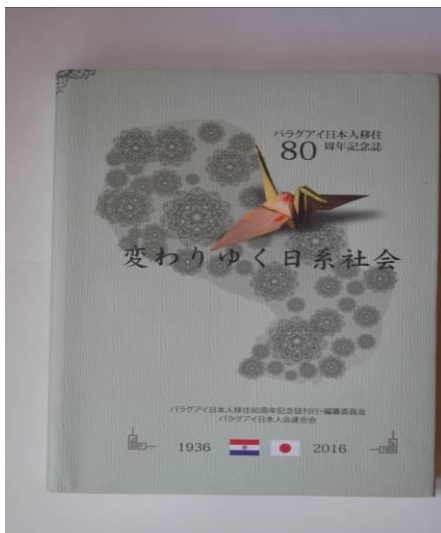


写真2-3. パラグアイ日本移住80周年記念誌 表紙

十分でないこと、など日本語教師としての実力をつけることも課題だ。

各地域の日本人会は日本語教育に力を注いでいるが、学習者の日本語力にばらつきが大きい地域ではより多くの教師が必要にもかかわらず、十分に教師の確保ができない。また日本人会の会員数が減少している地域では、経済的な支援が十分に行えないなどの悩みがある。

さらに現在、福祉事業は多くの部門でボランティアに頼っているが、日系人の高齢化にともない福祉の充実も迫られており、福祉事業の経費は増大すると見られる。したがって日本人会運営経費の点で、



写真2-4. パラグアイ日本移住80周年記念誌 内容

日本語教育のほかにも日本人会が行っている各事業とのかねあいも今後は難しくなるだろうと思われる。

一方、おもにパラグアイ人を対象に、パラグアイ国の教育機関により日本語教育が認められた学校がいくつかある。スペイン語による正規の授業以外に日本語をカリキュラムに採り入れるなど、各学校とも特色ある学校経営がされている。いずれも日本人の長所である礼儀正しさや約束を守ることなどを教え、パラグアイの将来を担う人材育成を目指している。日本語スピーチコンテストに参加する学校もあり、パラグアイ人の子どもたちが堂々と日本語でスピーチを行っている。また、日本語能力試験にも挑戦している学校がある。

日本語教育の行方

パラグアイは、南米でも日本語や日本文化がよく保たれている国だと言われる。

ラ・コルメナの3世の若者は学習した日本語で「祖父、祖母の時代に日本語はいったん途切れたが今後多くの子どもたちに日本語を学んで欲しい、母国語以外に日本語というツールを持つことは自分の将来の選択が広がることだ」と訴える。

日本語力が高い農村部の青年は、「移住地に安住せず、一度外国などへ行き外からの目を持ってまた移住地を見直すことや、移住地に外の風を入れることが大切だ」と言う。

首都アスンシオンの3世は十分に日本語で思いを語れずもどかしそうに、「私はパラグアイ人ではない、日本人でもない、日系人です。そのことに誇りを持

っています。自分の子どもには日系社会とつながりを保ってほしい」と語る。

一方、農村部の、両親は日本語を話さないが日本語習得度が高い日系高校生は、日本への留学を希望している。反対に家庭での会話は日本語だが習得が遅れがちな高校生は、日本語学習への興味が薄かった。

世界の主要言語が英語である現代で、日系人が日本語学習への意欲を強く持つためには、自身のアイデンティティを探る手助けをすることや、日本語が自身のルーツを知るカギであることを繰り返し日系人へ説くことが重要ではないだろうか。かつて日本への出稼ぎが多かった時代があったが、出稼ぎが人生のとりあえずの目的とならないよう、日本語学習が日系人の若者にとって生涯設計の大切な入口とな



写真 2-5. パラグアイ人も一緒に和太鼓の練習
アスンシオン夏季特別学級 2017 年

るようであってほしい。

パラグアイで日本語教育巡回指導を行った JICA シニアボランティアの猿渡哲夫さんは、「曲がり角にある日本語教育を支えるため現地日本人会とともに、日本大使館や JICA の支援も欠かせません。そして、現地の若者を根気よく継続して育てることが大切だと思います」と言う。

日本語学習は、日本と各国との友好・交流の架け橋となる重要な手段・要素であると思う。ボリビア、パラグアイでは日本に対する理解促進や交流などのために、日本人会が文化教室を開くなど日本文化の

発信のために努力している。日本国も国全体として、これまで培ってきた日本の工業製品の評判や伝統文化、新たに加わったサブカルチャー、そして現代日本の暮らしや市民による文化活動、環境活動など市民の日常の姿など、多彩な日本の魅力をよりいっそう多く発信することを願っている。また、日本への日系人・外国人留学生の受け入れをさらに促進することにより、その留学生たちが将来の日本との友好市民大使になってくれると信じている。

注1 継承日本語教育：(財) 海外日系人協会によると「中南米など日系社会中心に行われている日本語教育は、日本語をたんに外国語として教えるのではなく、日系子女のアイデンティティ形成を意図した子女教育の一環として、日本語だけでなく背景にある日本文化の継承をも目的としている」とある。

注2 日系人：(財) 海外日系人協会による定義は、「日本から海外に本拠地を移し、永住の目的を持って生活している日本人とその子孫の2世、3世、4世等で国籍、混血は問わない」。女性が現地の男性と結婚した場合、多くの国では夫の姓を名のため追跡が難しく、現在、実数を把握するのは困難になっている。

3. 南米大陸最高峰「アコンカグア6,962m」に登頂して

本間 奈生美 (団体職員)

2016年10月発行のCantuta27号に、「ボリビアのワイナポトシ登頂への軌跡」と題して、寄稿文を発表してからおよそ1年が経った2018年1月7日13:30、私は南米大陸最高峰アコンカグア6,962mの頂きに立った！

ボリビアのワイナポトシ同様、真っ青な空ととてつもない達成感が私を待ち受けていた。そして、私が到達した場所はヒマラヤ山脈を除けば、世界で最も高い場所、最も天に近い場所だ！

登頂後に数多くの方から、登頂に必要な要素は何か、どんな訓練をしたら登頂できるのか、人気TV番組「世界の果てまでイッテQ」でイモトアヤコも登れなかったあの山に素人がどうして登れるのか、などの質問攻めにあったが、その答えを簡潔に伝えることは難し

い。当然のことだが、登頂できる体力と精神力、事前トレーニング、技術力は十分必要であるし、最低でも5,000m峰を経験し高度に慣れておく必要もある。環境や生活習慣の全く違う国で初めて一緒に登山するガイドと十分コミュニケーションを取りながら行動できる協調性も必要である。そして天候に恵まれる運も持ち合わせていることも欠かせない。



写真 3-1. 最終キャンプ地 6000m 付近

その上で、アコンカグア登山で何が一番辛かったかと問われたら、私は真っ先に「長期間のテント生活」と答える。

私は今まで国内外の山に通算で300回以上は登っているが、アコンカグア登山ほど長期間を高山で過ごした経験はなく、山中に泊まる場合はほとんど山小屋泊まりしか経験していない。前述のワイナポトシでも山中2泊の山小屋泊まりである。今回のように14泊もの長期間をテントで過ごしたのは初めてであり、これがとにかく肉体的にも精神的にも過酷であった。

その理由は、第一にテントの場合、気象条件の影響をダイレクトに受けることが挙げられる。暑さ寒さ、風、雪など自然環境の変化を否が応でも感じざるを得ない。アコンカグアの登山口の標高は約2,900m、最初のキャンプ地は約3,400m、日中で天気が良ければ真夏の太陽が照りつけることもあって、気温は+25℃前後である。しかし、テント内は天井も低く狭いため、日中のテント内はサウナ状態で、体感温度は+35℃以上だと思われる。Tシャツに短パンでも汗が出るほどで、真冬の日本から来た身体には、とにかく暑くて堪ら

なかった。一方、太陽が沈むと気温は一気に低下、驚いたことにこの時期は21時近くまで明るい、その後暗くなると夜間は氷点下で、-10℃近くまで冷え込む。当然ダウンジャケットなどの防寒着を着込むが、1日のうちに体感で±45℃近い「気温変化」の激しさになかなか体が追いつかない。テント生活最初の苦難は、何とも気温差が激しいという程度の認識であったが、そんな甘いものではなかった。

次なる試練は「強風」である。アコンカグアの山頂付近は風が強いと聞いていたが、山頂だけでなく、登山口付近から総じて既に風が強い。ベースキャンプのある4,300m付近でも日によって突風が吹きさび、野外活動に支障が出るレベルである。日中の登山時でも風が強いとスピードは落ちるし体が風にあおられて大変歩きにくい。一方、夜ならばたとえ風が強くてもテント内にいるから安心かと思いきや、テントごと吹き飛ばすレベルの風に、おちおち寝ていられない。私は生まれて初めて睡眠中横になった姿勢のまま、テントごと体が浮き上がるという経験を何度もした。さながら船に乗って波に揺られているかの感覚である。波は一定のリズムがあるが、風にはそれがなく動きが予想できない。乗り物に乗っているわけではないのに、不意に下から突き上げられた風で体が浮く経験は、したくてもそうそう出来ない貴重な体験であった。体重45kgの私の体が「風」という自然現象によって浮き上がるのである。

あとから現地ガイドに聞くと、この程度の風はアコンカグアでは日常茶飯事で、テントや体が浮くレベルでは風速20～30m/秒前後とのこと。よく台風のと看、最大瞬間風速30m/秒などと報道されているのを見聞きするが、それと同等レベルの風である。この状況がどれだけ危険か、あとから知って怖くなった。

さらに、この風の中をテントが吹き飛ばれないように、一瞬の風の弱まりを察知し野外に出て、重しにしている石やその石にくくり付けている紐が外れていないかを見に行く必要もある。しかも風が強いだけでなく、雪も降っているときは吹雪で、加えて標高が上がるに連れ気温は下がり、夜は-10～-20℃の凍て

つくような寒さと、高度4,000～6,000mで地上の半分程度の酸素量による息苦しさというおまけも付いてくる。ワイナポトシのとき同様、日本から1人で渡航し現地ガイドとマンツーマンの登山を選択した私は、ガイドが男性ということもあり、テントには1人ぼっちで、誰も私の身を守ってくれない。まさに自分の身を守るのは自分だけだ。

加えて大変だったことといえば、「トイレ」の問題である。アコンカグアでも基本的に登山道にトイレはないが、日中はまだ何とかなる。また、ベースキャンプまではそれなりに適宜比較的堅牢な作りの簡易トイレが設置されている。それでも、真っ暗な中ヘッドランプの明かりを頼りにテントから30～50m離れたトイレに行くのは、なかなか大変である。前述したような強風、吹雪、寒さの気象条件ではトイレに行くだけで一苦勞である。とはいえ、簡易トイレはありがたい。壁に囲まれているので、トイレに入れば何とか風雪をしのげる。問題は夜で、特にベースキャンプより標高の高い上部キャンプ時だ。そこにもトイレはあるが、ここに設置されたトイレはいわゆる便座にビニール袋を入れたものをテントで囲っただけのもので、通称テントトイレと呼ばれ、大専用である。テントなので強風などの悪天候時は出入りするだけで大変、雪が降ると入口をふさがれるため使用不可という代物で、使用できればラッキーくらいに思っておいたほうがよい。小は各自岩陰で行う。なぜならば小は、液体であるため乾燥するからである。他方、大は高度と温度の関係で分解されないため、ビニール袋に排出されたものすべてをポーターがベースキャンプまで荷降ろししている。

どちらにしろ、気温が-10～-20℃の外気に触れた状態で皮膚を直接露出すると凍傷になる可能性が高まるので、上部キャンプでは、男性はPee Bottleという小専用の容器を使用し、テントの外に出ず、テント内でトイレを済ませている。登山者用の持ち物リストにもPee Bottleが含まれており、ほとんどの登山者が持参している。しかし、これを女性は使用できない、形状的に男性用であるからだ。では、私を含めて女性

はどうするか、これは非常に難問である。基本的にはテント外に出て済ませるしかない。これには本当に苦勞させられた。変な話だが、短時間でトイレを終えるコツをこの登山中に身につけた。これで何とか凍傷を免れたといっても過言ではあるまい。

できるだけトイレに行かなくてすむよう水分を控えたいところだが、逆に高所では水分不足は命取りになる。なぜなら高所は常に乾燥しているからだ。その上、酸素の少なさもあいまって呼吸数が多くなり肺の動きが活発になることから、肺から失われる水分量も多くなる。さらに、発汗による水分損失も乾燥した空気のもとでは大きくなる。脱水は血液を固まりやすくするため、凍傷にもかかりやすくなる。凍傷の理由は寒さだけでなく、脱水も一因ということだ。反面、高所では喉の渇きを感じにくくなる。よって、意識的に水分摂取に努めなければ、脱水になりやすい。私も毎日最低4Lの水分を取るようガイドから厳しい指導を受けた。そんなわけで、都会生活以上にトイレが近くなり、行かないではすまされない。夜は平均して7～8回、ほぼ1時間に1回はトイレに行きたくなる。高所で呼吸は速いし、寒さでなかなか眠れないなか、やっと寝たと思ったらまたトイレ。この繰返して睡眠不足にもなる。これが想像以上に辛い。

女性が長い期間を掛けて高所登山をするのは、トイレの問題を始め、生理現象、衛生面（当然その間身体も髪も洗えない）、などと上手く付き合っていかなければならないことを思い知らされた。実際に登山者の8割は男性、しかも体の大きな欧米人が多く、東洋人の女性はほぼ皆無であった。

もう一つ大変だったこととして、「高度順応」が挙げられる。過去に登った高峰キリマンジャロやワイナポトシでは、登山口から一気に標高を上げて山頂まで登ったが、アコンカグアではそれは出来ない。7,000m近い高度であることに加え、赤道から離れた緯度に位置する山であるため、上がったたり下がったりして体を高地仕様に慣らしてから登らなければ登頂率は極端に下がる。私も今回初めて知ったが、同じ標高でも赤道から離れるほど酸素濃度が薄くなるのだ。ほぼ赤道

直下にあるキリマンジャロと、南緯16度付近にあるワイナポトシと、南緯32度にあるアコンカグアでは、アコンカグアが一番標高が高いが、仮に三座が同じ標高だとしてもアコンカグアが一番気圧が低く、酸素濃度が薄い。実際、アコンカグア山頂で私の高度計で示した気圧は380hPaと地上の3分の1程度しかなかった。

そんなわけで、毎日標高を上げ続けて一気に山頂を目指せない。上がったたり下がったり、1日休養を取ったりしながら、徐々に標高を上げて体を慣らしていく。このため長い日数が必要になるわけだが、せっかく登ったのにまた下ったり、再度同じコースを登り返したりするのはなかなか大変な労苦で、これが予想以上に精神的ストレスとなった。いつになったら山頂へたどり着けるのか、こんなに天気の良い日に休日とは、など苛立ちは募る。苦労話は尽きないが、結果としてアコンカグアに登頂できたことは素直に嬉しい。また



写真 3-2. アコンカグア山頂、一番乗り！

体調管理や高度順応が順調だったこともあり、大柄の欧米人を差し置き、私が山頂にたどり着いたとき、私のほかには誰もおらず、つまり山頂に一番乗りであった！

アコンカグアへの登頂には、ゆっくり登っていればいつか着くというわけではなく時間に制限があり、特に山頂へのアタック日には酸素の薄い中を相当のスピードで登り続ける必要があるため、私はその日はいつも以上に意気込んでいた。その結果、一番にゴールを切るという快挙に繋がったのだろう。このときばかりは自分で自分を褒めてあげたい気持ちになった。正に「獣のような歩き」であったと言える。

2011年12月キリマンジャロ登頂後の私の次の目標はアコンカグアであり、途中6,000m峰ボリビア・ワイナポトシを経て、体力、経験、技術力に磨きをかけてから望んだアコンカグアに、こうして私は受け入れられた。6年越しであった。43歳冬の挑戦、「見事に花は咲いた。」

4. 広い世界を家とせよ！！今村 忠助の意 『残された宝庫－南米のボリビア』

日本海外協会 会長

日本ボリビア協会 副会長

今村 忠雄

今村忠助は私の父である、はじめにこの稿の概略を知って貰うために、その経歴から紹介を進めさせて頂きたい。

1899年（明治32年）に長野県下伊那郡座光寺村（現飯田市・観光地として元善光寺という寺がある）で出生し、誕生日の2月12日はアメリカ第16代大統領エイブラハム・リンカーンと同じ日である。地元の小学校を卒業後東京に出て小僧生活を経て大成中学へ進み、その間にも新聞配達や三等郵便局などで働いていたようである。

その後、立教大学に入り夜間の職工などをしながらも機会を得て米国中西部のシカゴに渡り、皿洗いや給仕をしながらアメリカ各地を廻り見聞を広める努力をしていたようである。帰国後立教大学を卒業し引き続いて日本大学に進み、この時期に朝鮮・インドを旅行するとともに軍務生活の体験もしている。日本大学を終えて後、立教大学に奉職し種々の活動に取組むとともに『世界遊記』（帝国教育出版部刊

行) という著書も出版している。

さらに 1930 年 (昭和 5 年) には監督として移民船ハワイ丸で 90 余名の移住者を引率してブラジルへ渡り、その足でブラジル各地を視察して廻り、その様子を『ブラジルを語る』として信濃毎日新聞から出版している。この著書は写真を多用して判り易く、終わりの部分には我が国のブラジル渡航移住の現状について報告するとともに、「如何なる移民を如何にして送るべきか」という移住政策のあり方に関し、北米移住と較べてブラジルへはどのように対応すべきかについてこれまでの反省を踏まえて将来の姿勢についても論じている。

これらの海外を旅した経験や日本の海外発展の方策について、学生時代から日本全国各地を講演して廻り、特に郷里の長野県では村単位で訪問していたようである。その様な活動の合間にもアジア各地を廻って『独立比律賓を語る』(平凡社刊行)を出版し、この本でも写真をたくさん使って分かり易く同国の国情や移民に関して記している。これらの他にも小雑誌などに記事等を発表している。

また、日本大学では農学部への拓殖学科の設置に努力するとともに講師も務め、さらに海外に行く青年のために海外同胞訓練所という施設を東京・杉並区に開設し、多くに青年に海外へ発展するための心構えを教えていた。私も小学校低学年のころ丁度父が講義を行う日に一緒に連れて行かれて、多くの訓練生の後方に座って聴講したことがある。講義終了頃に、日本人は黄色人種といわれるが汗腺が白人より多く黒人より少なく、寒冷地でも熱帯地でも適応して活動ができるという話がされていたことが妙に耳に残っている。

太平洋戦争後、此の訓練所勤務が一時父の活動に影響したことがある。戦争終結後に戦争に直接加担したものがA級戦犯に、その他がB/C級戦犯に指定され公職に就けない規制が行われた。父も海外活動が多いところから、訓練所の性格なども調査対象になった。進駐軍のMP2 名と日系人の中尉がジープに乗って家に来たことを覚えている。無論訓練所以

外の所属先にも調査に行ったのであろう。2 度目に来た時は、丁度 私が小学校から帰ってきた時で、父と応接間で話が行われた後、玄関先に送って出てきた父と日系人中尉とがニコニコして握手をしながら



写真 4-1. 自宅で書類を整理している今村忠助

ら帰って行く姿を記憶している。それから暫くして母からそっと父の戦犯指定などなく、先生のような人が訓練・指導して海外へ日本人を送り出してくれたら良かったのと言って帰って行ったと聞かされた。その後父の動きが活発化したことを強く感じている。

近所の知人や青年達がわが家に来て、夜遅くまで書類やらの整理をするようになり、急に 1946 年 (昭和 21 年) 4 月 10 日の第 22 回衆議院議員選挙に、一人一党で「革新社会党」と名乗って立候補することになった。この選挙は俗に「終戦解散」「GHQ解散」選挙と言われ、民主主義と婦人参政権などが論争の焦点で、選挙区は全県一区と広く、多くの候補者が立ち、婦人議員が急増する時代背景の中で行われたが、残念ながら当選を果たすことはできなかった。

次いで、1947 年 3 月に俗に「新憲法解散」といわれる第 23 回衆議院議員選挙が行われ選挙区割も長野県は 4 区に分けられて、うち第 3 区で 4 名の当籤者中第 3 位で当選することができた。所属は諸派、職は大学講師の肩書であったが、当選後に一人一党では仕事は何もできないということで、自由党に入党して議院運営委員となった。皆さんも聞いたことがあると思うが、開会の前後などに「ギーチョウー」

と大声で発言し議事を進める進行役なども務めた。さらに 1948 年 12 月の第 24 回選挙は俗に「なれあい解散」と言われたが、この時も第 3 位で当選した。この期の衆議院において「海外移住促進に関する決議案」を父が提案者となり、自由党、改進黨、左派・右派両社会党、各派の賛意を受けて決議している。

次いで、1952 年 9 月に俗にいわれる「バカヤロー解散」でも当選を果たすことができた。この任期中に議員運営委員会を中心として北米視察団を編成し、米国各地を視察し帰国後に『躍進アメリカを観る』（今村忠助後援会発行・325 ページ）を著し、学生時代の米国をも比較した体験をも含め、排日運動の経緯なども合せて記している。

また、この議員時代には、中南米を一人で僅かな旅費割当を工面し大切に使いながら各地を廻っている。戦線の南米旅行は船旅であったため、時間などの関係から海岸線の国を訪れることしかできなかったため、ボリビアやパラグアイに足を延ばすことはできなかったようである。従ってボリビアへの認識もあまり深くはなかったように思われるが、ブラジルの南米銀行の宮坂国人民からボリビアのサンタクルス付近に良い所があると聞いたようである。

この頃に父がサンパウロで偶然に会った人に私も後日会うことができ、その頃の様子を聞いたことがあるが、父は街のパステル屋で独りで立ち食いをしていて、或る人が、先生ともあろう人がレストランにでも行ったらどうかと言ったところ、まだ、パラグアイ、ボリビアと廻りたいので割り当てられた旅行用の外貨を少しでも大事に使いたいと答えたとのことであった。当時のことを考えると相当の貧乏旅行であったのだろうと想像される。

そのようにしながらボリビアに入り、多くの人達に各地を案内してもらい、日本とボリビアとの提携の必要性を深く信念として持つに至ったと思われ、このことから一層詳細な調査に時間を掛けてボリビア各地を観て廻ったようである。

丁度、この頃に大評論家と言われた大宅壮一氏も

ボリビアに来ておられ、今村忠助代議士がいて聞き、ラパスのホテルに訪ねてこられた。この時の様子を同氏は『世界の裏街道を行く・南北アメリカ編』（文芸春秋新社）に相当長く書いておられる。

その概要を紹介すると「彼(今村)は移民問題に力瘤を入れており、大統領や農務大臣に会って具体的折衝を進めていることにつきこれまでのあらましを聞いた。特に農務大臣は日本から移民の受入れることには熱心である。そこで今村氏は毎年日本から 1 万人ずつ 10 年計画で 10 万人を移住させる方針を立てた。そのためにボリビア開発公社を作り、農業移民ばかりではなく、病院、学校、農業試験所、各種農産物加工所、農機具の制作・修理工場などで働く技術者をも大勢つれてきて、総合的な大移住地とする。それに必要とする 10 億円余の資金は日本側の全額出資とし、米国が貸してくれることになっている移民援助金 1500 万ドルの一部をこれに当てるというものだ。さらに資金を一層有効に生かすために、日本で生産するものでボリビア国が必要とするものは無関税輸入をボリビア政府が認め、その売り上げを

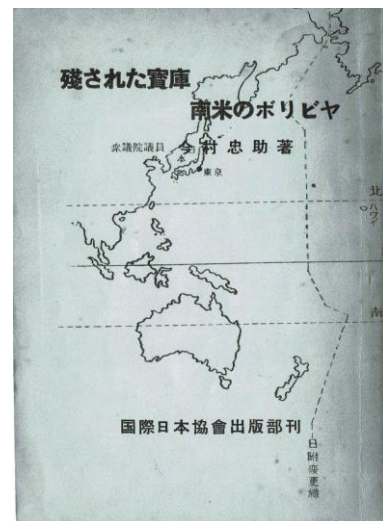


写真 4-2. 著書『残された宝庫・南米のボリビア』表紙

も開発公社の資金に充当することとして、前記の事業の許可してもらおうという話を大統領に持ち込んだ。すると大統領はあなたの案を全面的に認める用意があるが、何日までに実行に移せるかと反問されたほど、先方ボリビア側はこの案に熱心な態度を示した。

その晩は今村氏と大宅壮一氏は日本人会に招かれ

て出席し、大宅氏は日本の事情などを話し、今村氏は大変なハリキリ方で早速日本に帰り吉田茂や緒方竹虎に会って一日も早く具体案を持って再びボリビ



写真 4-3. 開拓途上で出会ったパラグアイの奥地・フラム移住地での先住民親子（背後は住宅）

アを訪れたいと話し、大喝采を受けたと記している。

大宅氏は今村氏の計画は立派なもので、これからの移民はこういうやり方をしないと成功の可能性は少ない。その後、今村氏を失ったことはボリビア移民のために大きな損失だと日記に記している。

なお、話は前後するが、大宅氏は父からの手紙や紹介状を持ってサンタクルスを訪れて、多くの日本人に会い話を聞いている。そして、今村氏が日本移民を入れようとしているところは、このサンタクルスから 110 キロ離れたヤパカニ川の流域で 1 万 8 千町歩の払い下げを申請し、その土地は国連の調査では腐植土が 2 メートル半もあってウクライナの 4 メートルに次ぐという。また、サンタクルスから幅 8 メートルの道路がついており、自動車なら 1 時間半で行ける。大宅氏の本では、今村氏は令息のためにこの土地を 500 町歩ばかり買った。1 町歩 1 ドルだからただみたいなので、自分も旅費を節約して若干買おうかと思ったが、ここまでの旅費の方が何十倍もかかるので断念したと記している。

大宅壮一氏の本からの引用はこの程度にして、父は 1954 年(昭和 29 年)の暮れに帰国したが、当時、第 27 回の総選挙が間近に迫っている雰囲気であることから、長野の地元からは早急に帰郷して選挙への対応を求める声が大きくなってきていた。

しかし、父はボリビアからの帰国報告や資料の提出はこの内閣のうちに仕上げておかねばと日夜作業を進めていた。その折、朝の庭先での清掃で指先に傷を負ったが、まさか破傷風菌が行っているとは思わずにいたところ日に日に口が重くなり、体を横にして口述筆記のようになった。ボリビアの現地で撮ってきた 16 ミリフィルムも散逸しないように撮った順に継ぎ合せて上映し、ただ一回だけ重い口から場面場면을簡単に説明をただけで終わっている。破傷風は急速に重くなり、病院に入り。僅かな刺激を与えるだけでも大きな引きつけを起こすので、刺激を与えないように真っ暗闇のなかで治療を続け、あと数時間持てば山場を越えて楽になり良くなると言われたが、残念ながらそれまで持たずに 1954 年(昭和 29 年)12 月 16 日に郷里に帰ることもなく急逝した。それは、ボリビアを広く多くの人に知って貰おうと努力していた『残された宝庫、南米のボリビア』の著書を残しての死であった。

話は少し戻るが、父は 1954 年 3 月に日本ボリビア協会の設立に中心的役割を果たし、会長に岸信介元総理に就任して頂き、父自身は理事長に就いて日本とボリビアとの文化および経済の交流促進、両国民の親善・福祉に寄与しようと始めていた。岸会長は父の亡きあとボリビアのパス・エステンソロ大統領が来日した折には、協会主催で関係者多数を自ら招いて椿山荘で歓迎会を開いてくれた。この縁で父の弟の今村邦夫は国際技術建設協会にいた関係で大統領らと親しくなり、大手商社の協力を得てボリビアに砂糖工場を稼働させる協力をしている。

また、父は協会設立の前に、自宅の庭先に 2 階建て木造の事務所兼教室と宿泊所を建てて「国際日本協会」を設立し事務所を置くとともに、「日本国際塾」の看板を掲げ、青年の宿泊・訓練を開始した。何人もの青年が集まって準備を進めるとともに、スペイン語、ポルトガル語の教室を開き、商社の南米転勤予定者などがこっそりと人知れず勉強しに来るなど、自らの力で事業開始へ向かって準備を考え進めていた。日本国際塾には標語の「広い世界を家と

せよ！！」を世間に訴えようと字を大きく彫り掲げていた。

1955 年(昭和 30 年)に特殊法人「日本海外移住振興株式会社」が法律を持って設立され私も入社した。そして、パラグアイのフラム移住地造成業務への赴任を命じられ奥地に入ったが、父の残して行った移住について、1951 年 9 月 8 日にサンフランシスコ平和条約締結書に署名し移住振興会社の設立のキッカケをつくられた吉田茂元総理に一言挨拶を陳べるとともに先に触れた 1500 万ドルの借款についての事情を知ることができればと思い、大磯の吉田私邸に希望を伝えたところその機会を得ることができた。玄関先での挨拶程度になるものと思いながら伺うと応接間に通された。そこで思いつくままに移住に就いて尋ねると、太平洋戦争に負けた国はドイツ、イタリア、日本の 3 か国であり、その中で苦しみは少なかった国はイタリアである。同国は戦前に多くの同胞を海外に出しており、それらの人々の協力や援助があったからだと多方面からの分析を話して頂いた。そして、イタリアは日本と同じ位の大きさで火山もあるし、周囲もほぼ海に囲まれているとも話され、日本も発展し生きて行くには広い世界を相手にした活躍を必要とすると種々の面から説明された。そして日本も講和条約を結んだうえは、一日も早く国際社会に復帰しなければならぬと話され、復帰後も対外的には様々なことがあるだろうが、それを解決しながら進むことが外交であると日本の復興への力強い話を聞くことができた。

元総理はその後、私が遠慮して外に待たせておいた妹達のいることを知り、全員を応接間に上げられ妹が犬を好きという愛犬を連れてこさせて、気軽な冗談を含めて気安く話をされ、今日は楽しく話ができ、夕食を食べて行くかということまで言ってお下された。そこで元総理は写真嫌いと言うことから遠慮して初めはカメラを出さなかったが、思い切っ

て辞する時に俺も若かったら「猫の額のような日本にはいないよ」と海外に行く私を励まして下さった。その折の話の中には父が語っていたことが多々あり心に残る話を伺った。

母は父の仕事の整理をした後、僅かに残った資金でタオルに「今村忠助の意、広い世界を家とせよ」と染め抜いて、横浜・神戸を出る移住者の全てに贈っていた。

また、大宅壮一氏の本にあるように、父はボリビアに土地を買い僅かばかりの手付金を置いてきたが、父の死を知りその意のあることを知ったボリビア人が、本来ならば返さなくてもよい手付金の全額を、お悔やみとともに返してきてくれたことは、ボリビアの人々の暖かい気持ちとして今も心に残っている。

父の墓は今も出身地の座光寺村にある。元善光寺にも有志と共に釣鐘を寄贈している。父の一生を振り返り、その鐘は「平和の鐘」と名付けられ、そこに彫られたその文字の揮毫は吉田元総理のものである。

(終わり)



写真 4-4. 吉田茂元総理大臣から海外赴任に先立ち 3 時間に亘る人生訓話を受ける

ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

- ① 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9
100 años de historia de
la inmigración japonesa en Bolivia
2 を原典として 2012 年までを追補
在庫多数
- ② 『ボリビアに生きる』 2000-3
日本人ボリビア移住 100 周年誌
在庫 1 冊
- ③ 『大地に生きる沖縄移民』 2005-12
コロンビア・オカサ入植 50 周年記念誌
在庫 2 冊
- ④ 『拓け行く友好の懸け橋』 2005-12
サンファン日本人移住地入植 50 周年
記念誌 在庫なし（現地にもなし）
- ⑤ 『ともに 50 年そして未来へ』 2006-12
サンタクルス中央日本人会 50 周年記念誌
在庫なし
- ⑥ 『ラパス日本人会 90 年の記録
1922-2012』 2012-10,
在庫 3 冊
- ⑦ 『ギュンターの冬』 2016・7
パラグアイのストロエスネル独裁政権
時代を描いた異色のミステリー政治小説
在庫多数

統一価格①—⑦共 2500 円（税送料込）

ご注文は当協会まで、下記へメール又は電話で、
お名前、ご住所、電話 #、書籍名、冊数をご連絡
ください。

admin@nipponbolivia.org Tel:042-673-3133

御支払は銀行振込でお願い致します。

（口座番号、名義人は発送時に連絡します）

前号以降の主な出来事

- 12/1 当協会主催クリスマス講演会
（東京・日比谷・東京六甲クラブ）
- 12/8 ペルーとボリビア・ラテンアメリカ文化コンサート
（東京・目黒区 パーシモンホール）
- 12/17 宮良多鶴子クリスマスコンサート
（横浜 ホテルパシフィコ）
- 12/26 ワイラハポナンデス日本公演
（東京・府中市 市民活動センター）
- 2018/1/24- 31 アラシタ・豊かさの祭り
（東京・千代田区・セバンス協会）
- 1/28 川崎ボリビア料理教室
（川崎市幸区川崎市民会館）
- 2/15 当協会主催ボリビア映画の会
（東京・日比谷 東京六甲クラブ）
- 2/20 キヌアの日
（東京・港区ラテンアメリカサロン）
- 3/24 海の日 (Dia del Mar) 記念イベントと
Chagas 病検診
（群馬県太田市小泉町文化展示ホール）

編集後記

この号は、南米現地での日本人子女教育、
日系人への日本語教育、南米最高峰登頂、
当協会創立者の一人であり、初代理事長の
今村忠助氏と創設の経緯 等、多彩な内容と
なりました。

執筆者の方々に篤く御礼申し上げます。

編集委員

白川光徳 細萱恵子 杉浦 篤

Copyright© 2002-2018

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

（本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています）